

今だからできること、そして、今しかできないPTA活動 ～1.1能登半島地震 被災地で生まれた本当の協働～

石川県能登町立能都中学校PTA
会長 吉村昌央

1 はじめに

能登町は、石川県の能登半島の北部に位置し、平成17年能都町、内浦町、柳田村が合併した、人口14,000人、平成23年「能登の里山里海」が世界農業遺産に認定された自然豊かで農漁業が盛んな町である。

町内に4中学校、5小学校があり、能都中学校は生徒数100名（1年生38人 2年生32人 3年生30人）の小規模校である。

令和7年4月に小木中学校と統合予定。順次、町内4中学校を全て統合予定。

キーワード 「命」「学び」「目標」



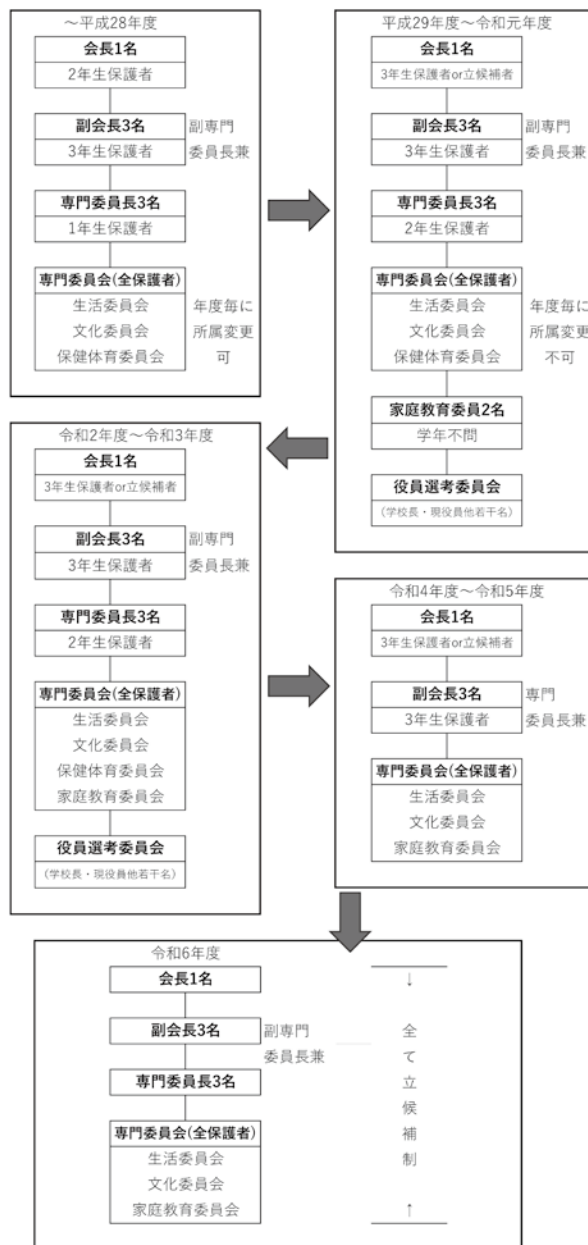
《校舎全景》



《校舎正面》

2 能都中学校PTAの組織と活動状況

(1) 役員選出・組織の編纂



(2) 過去のPTA活動

- ・安全あいさつ運動
- ・祭礼巡視活動
- ・PTAバザー・喫茶の企画運営
- ・PTA広報の発行
- ・体育祭PTA種目の企画
- ・空き缶リサイクル活動



《過去のPTA活動》

以前は、一人一役、役員も半ば強制的に選出される仕組みであったため、役員選出の総会では、できない理由の発表会となっていたのが現実であった。

恥ずかしながら、自慢のできるPTA組織ではなかった。

組織を構成すること自体に時間を費やされ、本来あるべき活動が後手に回り、結果として前例踏襲、惰性、都合に合わせた組織改編を繰り返していた。

追い打ちをかけるコロナ禍の影響から、3年間PTA活動が完全に停滞し、役員会、総会の未開催により、役員選出もままならなくなった。(内、会長のみ選出が1年)

会長以外の役員が空席となり、専門委員会の活動も休止となった。

役員不在のため町Pとの連携が不十分となり、やがて単位PTAの存在意義が問われ、失われつつある状況に陥った。

次期役員選考すらできず、元・前会長からの直接の打診により、令和4年度より現会長が務める。

(3) 現在のPTA活動

コロナ禍あけ、活動の見直しを協議し、オンラインを駆使するより、リアルでの活動に重きをおきたいと考え、原点回帰、誰のための、何のための活動なのか？を見つめ直し、あらためて組織の改編、「脱」強制、保護者の自主性にシフトした活動に絞り込んで再スタートすることとした。

「できるひとが、できるときに、でき

ることを」、価値観やコンディションの違う保護者それぞれの小さな力が、やがて一つの輪となり、いずれ大きな力となって、生徒たちの背中を押すことに繋がれば、必ずや達成感、満足感を生み出せるであろうと考えた。

PTAの存在意義を問われている昨今、「ネガティブをポジティブに!」、やらされている感を払拭し、今1人ひとりに何ができるかを考え、わが子に関わる今しかできないPTA活動を全員が負担なく、心からの「愛情」をもって活動し、生徒たちと共に本当の笑顔になれる組織を目指し、新たな活動を計画、実施することとした。

- ・役員は学年問わず、全て立候補制
- ・活動の出欠簿を廃止
- ・統合を見据えた新規活動
- ・企画運営は各委員会付託
- ・参加は全会員・全生徒が対象
- ・親子奉仕作業
- ・グラウンド除草作業
- ・校舎美化活動
- ・制服リユース



《体育祭前 グラウンド除草作業》



《学校祭前 校舎美化活動》

- (4) 令和6年1月1日16:10
令和6年能登半島地震 発災
軌道に乗りつつ再び動き出した矢先の
被災。



《被害を逃れ避難所となった校舎（体育館）》



《生徒の学習環境を守るため、町外への集団避難を実施》

(5) 地域行事・学校行事の中止・延期

特に、卒業式について本校は第一体育館が避難所となったため（指定避難所は本来第二体育館であったが、建物被害により第一体育館を避難所に変更）会場はランチルーム、保護者2名、在校生代表のみ（送辞）、他各教室にてオンライン参観（町内他校は体育館を避難者スペースと仕切って半面で、他市町は別会場で他校と共同で開催）での開催となった。

しかし、卒業生から「例年通りの会場で卒業式を迎えたい。」在校生からも「この目で直接卒業生を送りたい。」との声上がり、PTAとして検討することとなった。

(6) 問題点

- ・本来の指定避難所である第二体育館（移動先）の改修
- ・避難所運営計画の変更
- ・避難者の移動
- ・支援物資の移動
- ・卒業式の会場設営

(7) 必要な調整

- ・町教育委員会と町危機管理室との協議
- ・避難者の同意と理解
- ・移動、設営にかかる人員

(8) 経過

- ・役員以外の多くの保護者が自主的に参加
- ・卒業生、在校生が放課後に参加
- ・地域住民ボランティアの協力
- ・避難者のOB・OGの協力

(9) 本当の協働（卒業式は体育館で）



私自身、単P会長を10年務めた中で、最後の最後に続けてきて良かったと心から実感した出来事だった。

活動を実状に合わせて方向転換したことで、本校のPTA活動に対する保護者、生徒の意識が少なからず変わった。

決して望んだことではないが、今回の被災が大きなきっかけとなったことも事実。

3 被災したことも含めて学んだこと（成果）

- ・ 当たり前の日常のありがたさを心から実感。

- ・ 今までやっていたからという理由だけでは理解してもらえない。
- ・ 目標（ゴール）、目的が明確であれば、納得して参加してもらえ、共に達成感を得られる。

4 復興に向けた今後の課題

- ・ 再建・再興
ライフラインの再生
学習環境の整備
- ・ 何より、子どもたちの日常を取り戻す。

5 おわりに

当たり前の日常が、一瞬にして奪われました。

被災し、荒れた町並みを眺めて我が目を疑う光景に不安しかありませんでした。

想像以上に進まない復興。

しかし、県内外からの多くの支援者の方々、何とか自力で立ち上がろうとする地域の皆さんそして子どもたちの笑顔にたくさんの希望を与えてもらっています。

生まれ育ったふるさとは、何年経てば元に戻るかわかりません。

それでも私たちは子どもたちと共に、生まれ育った「この能登に生きる」覚悟です。

